

特許協力条約

発信人 日本国特許庁 (国際調査機関)

代理人 菅原 正倫 様		PCT 国際調査機関の見解書 (法施行規則第40条の2) [PCT規則43の2.1]	
あて名 〒460-0008 日本国愛知県名古屋市中区栄二丁目9番30号 栄 山吉ビル 菅原国際特許事務所		発送日 24.5.2005 (日.月.年)	
出願人又は代理人 の書類記号 PCT0401252S		今後の手続きについては、下記2を参照すること。	
国際出願番号 PCT/JP2005/003133	国際出願日 (日.月.年) 25.02.2005	優先日 (日.月.年) 26.02.2004	
国際特許分類 (IPC) Int.Cl. ⁷ H01L33/00, H01S5/323			
出願人 (氏名又は名称) 信越半導体株式会社			

<p>1. この見解書は次の内容を含む。</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 第I欄 見解の基礎 <input type="checkbox"/> 第II欄 優先権 <input type="checkbox"/> 第III欄 新規性、進歩性又は産業上の利用可能性についての見解の不作成 <input type="checkbox"/> 第IV欄 発明の単一性の欠如 <input checked="" type="checkbox"/> 第V欄 PCT規則43の2.1(a)(i)に規定する新規性、進歩性又は産業上の利用可能性についての見解、それを裏付けるための文献及び説明 <input type="checkbox"/> 第VI欄 ある種の引用文献 <input type="checkbox"/> 第VII欄 国際出願の不備 <input type="checkbox"/> 第VIII欄 国際出願に対する意見</p>
<p>2. 今後の手続き</p> <p>国際予備審査の請求がされた場合は、出願人がこの国際調査機関とは異なる国際予備審査機関を選択し、かつ、その国際予備審査機関がPCT規66.1の2(b)の規定に基づいて国際調査機関の見解書を国際予備審査機関の見解書とみなさない旨を国際事務局に通知していた場合を除いて、この見解書は国際予備審査機関の最初の見解書とみなされる。</p> <p>この見解書が上記のように国際予備審査機関の見解書とみなされる場合、様式PCT/ISA/220を送付した日から3月又は優先日から22月のうちいずれか遅く満了する期限が経過するまでに、出願人は国際予備審査機関に、適当な場合は補正書とともに、答弁書を提出することができる。</p> <p>さらなる選択肢は、様式PCT/ISA/220を参照すること。</p>
<p>3. さらなる詳細は、様式PCT/ISA/220の備考を参照すること。</p>

見解書を作成した日 10.05.2005			
名称及びあて先 日本国特許庁 (ISA/JP) 郵便番号100-8915 東京都千代田区霞が関三丁目4番3号		特許庁審査官 (権限のある職員) 土屋 知久 電話番号 03-3581-1101 内線 3255	
		2K	8826

第I欄 見解の基礎

1. この見解書は、下記に示す場合を除くほか、国際出願の言語を基礎として作成された。

この見解書は、_____語による翻訳文を基礎として作成した。
それは国際調査のために提出されたPCT規則12.3及び23.1(b)にいう翻訳文の言語である。

2. この国際出願で開示されかつ請求の範囲に係る発明に不可欠なヌクレオチド又はアミノ酸配列に関して、
以下に基づき見解書を作成した。

a. タイプ

配列表

配列表に関連するテーブル

b. フォーマット

書面

コンピュータ読み取り可能な形式

c. 提出時期

出願時の国際出願に含まれる

この国際出願と共にコンピュータ読み取り可能な形式により提出された

出願後に、調査のために、この国際調査機関に提出された

3. さらに、配列表又は配列表に関連するテーブルを提出した場合に、出願後に提出した配列若しくは追加して提出した配列が出願時に提出した配列と同一である旨、又は、出願時の開示を超える事項を含まない旨の陳述書の提出があった。

4. 條款意見：

第V欄 新規性、進歩性又は産業上の利用可能性についてのPCT規則43の2.1(a)(i)に定める見解、
それを裏付ける文献及び説明

1. 見解

新規性 (N)	請求の範囲 6, 7 請求の範囲 1-5	有 無
進歩性 (I S)	請求の範囲 7 請求の範囲 1-6	有 無
産業上の利用可能性 (I A)	請求の範囲 1-7 請求の範囲	有 無

2. 文献及び説明

文献1 : JP 9-64484 A (松下電器産業株式会社) 1997.03.07
 文献2 : JP 8-335717 A (ローム株式会社) 1996.12.17
 文献3 : JP 64-81277 A (株式会社東芝) 1989.03.27
 文献4 : JP 2002-305327 A (シャープ株式会社) 2002.10.18

・請求の範囲1, 2, 5に対して

請求の範囲1, 2, 5に係る発明は、文献1-3により新規性・進歩性を有さない。すなわち、請求の範囲1, 2, 5に係る発明の発光素子は、基板本体及び分離用化合物半導体層が存在せず、副基板部に切り欠き部を設けたものである。そして、文献1-3に記載された発明におけるG a A s 基板は、請求の範囲1, 2, 5に係る発明における副基板部であることができるから、請求の範囲1, 2, 5に係る発明は文献1-3に記載された発明と同一である。

・請求の範囲3に対して

請求の範囲3に係る発明は、文献1により新規性・進歩性を有さない。

・請求の範囲4に対して

請求の範囲4に係る発明は、文献2により新規性・進歩性を有さない。

・請求の範囲6に対して

請求の範囲6に係る発明は、文献2及び文献4により進歩性を有さない。

すなわち、文献2に記載された発明は電極が光り取り出し面にも形成されているが、光取り出し面に電極を形成せずにその反対面に互いに異極性の2つの電極を形成することは、文献4にも記載されているように周知技術であり、この技術を文献2に記載された発明に適用することに格別の困難性が認められない。